



FACULTY OF LETTERS

文学部生のリアルな！ 字生生活

Vol. 62

13専攻・1プログラムから成る文学部の充実したキャンパスライフと、
文学部ならではの多様な学びの情報を発信します。



文学部人文社会科学科東洋史学専攻3年
宮城県仙台第二高等学校出身

寂然として成る

くまがいたまほ
熊谷 碧生

についてお話ししたいと思います。

私は現在、本学の東洋史学専攻に在籍しており、同時にスケート部アイスホッケー部門のマネージャーも務めています。大学に入学してからの3年間で、私は想像を超えるほどの「学び」に出会いました。

学業の面では1年次から、大学に入学したら学びたいと思っていたことを存分に学び、抱えきれないほどの財産を享受してきました。学んでいる時間は今後数十年を生きる自分の土台を醸成しているような気分です。何とも言えない幸福を覚えます。ただ、「何かに役立つ」といったような、実践的なことを学んでいるのかと問われると、それもまた違う気がします。

現在はイスラーム地域史ゼミに所属し、網羅的にイスラームについて学んでおり、史学専攻として歴史の扱いについて深く葛藤する日々が続いています。他者の文化や信仰に触れる中で、「自分とは何か」「知るとはどういうこ

とか」という根源的な問いに向き合う機会も増えました。

文学部の学びは、とすれば「役に立たない」「コスバ、タイパが悪い」と評されることがあります。しかしその「欠点」こそ、短期的な効率を超えて寂然として成るもののように、静かにゆっくりと自分を耕していく時間を与えてくれます。

答えの出ない問いに向き合うことを忌避したり、軽んじたりする人は多くいますが、実際のところ文学部はそういった学部です。すぐに成果として現れることがなくても、思考の土壌を豊かにしていく営みこそが文学部生の学びの本質なのではないでしょうか。

学問の場で「問い続ける」ことを学ぶ一方で、私は部活動の現場でも、同じように答えのない問いと向き合う時間を過ごしてきました。マネージャーとしての経験もまた、私にとって重要な「問い」を創出する時間となっているのです。



紙で板書の方が覚えられるのでパソコンは使わない

私の属するアイスホッケー部は、昨年9年ぶりのインカレ優勝、今春には連覇達成と、「強い中央大学」の名を取り戻しつつあります。毎日、筆舌に尽くしがたい時間を選手・スタッフ・マネージャーで共有しており、入部したことに後悔を感じたことは一度もありません。入部を決意するまでは大分逡巡しましたが、アイスホッケーを一目見た瞬間、そんな迷いなどあっさり忘れるほどとりこになり入部を決めました。現在は3年生であるものの年齢としては一番上なので（1年浪人しているため）、さまざまな業務を任せてもらっています。今年から新設された「合宿担当」もその一つで、監督からこのお話を頂いた時、ほとんど二つ返事で引き受けました。非常に学びの多いポストで、人を支えるとはいかなるものかというマネージャーの根幹に触

効率が最優先される、遠回りなどしてられないこの社会を、我々は一体どのように生きるべきでしょうか。そんな社会において、大学生という限られた時間をただ成果や答えを求めめるためではなく、問いそのものと向き合うために使うことこそ、人文学を学ぶ者の特権だと私は考えています。

本稿では、文学部生として、そして一人の学生としてたくさんさんの経験を通じて感じた「問い続けることの価値」



共に活動するマネージャーと優勝の喜びを分かち合う



試合ではスマホや一眼レフを持って会場中を駆け回る



所属するアイスホッケー部は夏大会で4連覇を達成した

れる機会も増え、引き受けて良かったと常々感じています。
「なぜマネージャーなんてやるの？」
決まり文句のように耳にする問いですが、私もいまだに答えを見つけないとができていません。確かに「なんて」と思われてしまうほどに、今の私は「マネージャー」として学生生活の非常に多くの時間を捧げています。はたから見れば自分ではなく他者を四六時中支える、到底理解できない仕事として捉えられがちです。「よくできるね」と言われることもしょっちゅうです。
練習の準備や動画撮影、アップロード、合宿手配など、華やかさとは無縁の仕事に日々多くの時間をつぎ込む中で、「なぜ自分はこの役割を担うのか」と

と何度も自問しました。
しかしながら、答えは出ないにしても、私は人を支えるという行為そのものに深い学びがあると感じたため、今でもマネージャーの活動を続けています。効率を求めれば削ぎ落されてしまうような関わりの中にこそ、人間の営みの本質が潜んでいる——そう思うことが増えてきたのです。
このように配して論じてみれば、質問も部活動も、私にとってはどちらも「答えの出ない問い」と向き合い続けるという点で共通しています。
冒頭で述べたように、現代社会では効率为重んじられる場面が増えていきます。しかし、すべてを効率で測る生き方では見落としてしまうものがあります。

学びを可視化する

文学部ドイツ語文学文化共同研究室

文学部には、13の専攻と総合教育科目それぞれに「共同研究室」と呼ばれる学びの拠点がごございます。今回はその中から、ドイツ語文学文化専攻の共同研究室、通称「独文研究室」をご紹介します。

独文研究室は多摩キャンパス3号館5階にあり、専任教員が選定した約2万4千冊の図書や雑誌、映像資料を所蔵しています。主にドイツに関連した書籍で構成され、その約9割が洋書という点が大きな特徴です。落ち着いて学べる自習スペースや、大学院の授業で使用される演習室も備わり、所属学部や学科、専攻を問わず、多くの学生や院生にご利用いただいています。

当専攻の学生の多くは、大学に入ってから初めてドイツ語を学びます。最初は研究室内の洋書の多さに驚きや少し不安を感じる学生もいるようですが、学びを重ねるうちに少しずつ原書と向き合い、卒業論文や卒業研究の執筆段階で

は、ドイツ語の文献を手に熱心に取り組む姿が見られます。その成長を目にするたびに社会へ羽ばたく日が近づいていることを感じ、非常に頼もしく思います。

また、独文研究室には Goethe-Zertifikat (CEFR 準拠の国際的なドイツ語検定試験) やドイツ語技能検定試験 (独検) に対応した参考書もそろっており、試験対策の学修に活用できます。日々の学習の成果を、資格試験という目に見える形の目標として意識することで、学びへの励みや意欲を高めるきっかけにもなるのではないのでしょうか。

このような専門書に囲まれた静かで落ち着いた環境は、知識を深めるだけでなく、仲間や教員との交流を通じて視野を広げる場にもなります。そして独文研究室を含む各研究室には室員が常駐し、資料の利用案内や学習支援、日々の相談など、幅広く大学生生活のサポートを行っています。ご子孫の学びを支える場として、共同研究室を大いに活用していただければ幸いです。

文学部だより

す。教室では探究し続け、部活では「人を支えることの意味」という問いに向き合う日々は、混沌のような、霧中をさまようような時間であり、決して文学的に語れるような色鮮やかで華やかなことばかりではありません。それでも、こうした非効率の積み重ねの中に私は確かな充足を感じています。

皆さんの時間も「効率」との折り合いの中で進んでいるかもしれない。しかし、どうかその中でたった一つだけでも、「効率を超えてでも向き合いたいこと」を見つけてほしいと思います。その時間こそが、皆さん自身を深く耕す人文的な営みの始まりとなることを祈ります。



独文研究室の受付を飾る、グリム兄弟の像